

5月

「"Geschmacklose" Kultur」 アントニア・シュルト

1.コラムの中で、今まで何回もドイツの伝統的な行事、すなわちクリスマス、イースターなどをテーマにして、過ごし方や歴史的な背景について書いてきました。先月はちょうどイースター（復活祭）をお祝いしましたので、それをテーマにしても良いでしょうが、同じような振り方だとあまり意味がないと感じます。その代わりに、最近色いろんな場面で考えさせられた近代文化における伝統的な行事の意義について少し考えていきたいと思います。



2.ドイツの場合はほとんどの行事にはキリスト教にルーツがあります。日本でもお祝いされているクリスマス以外は復活祭、キリスト昇天祭、聖霊降臨節などありますが、どんどん宗教から遠ざけているドイツでもイースターとクリスマス以外、普通の休みの日として迎えられていることが多いです。つまり、教会に行かず、特に決まったことをせずに過ごすことが一般的です。ヨーロッパでは1970年代から無宗教の人の数が膨張しつつあります。理由は様々ですが、現代社会の考え方においては他界より顕界が大事にされ、若者の実存的な問いも聖書の中で十分答えられていないといった事情があるでしょう。日本と違って、ドイツではキリスト教のいずれか一つの教会に所属するのが当たり前でした。1950年代までドイツ人の96%が教会員だったことに対して、その数字が2022年に50%を下回りました。それは良いことか良くないことか、私は判断できませんが、行事の背景にある宗教という部分がどんどん薄くなってきている中、お祝いをしても「味」が変わっていく気がします。



3.ちなみに、クリスマスはプレゼントをもらう日で、イースターはチョコレートを食べる日ぐらいで終わります。クリスマスにサンタ形のチョコを食べるが、イースターはウサギ形のチョコを食べるという違いです。チョコを食べることが間違っているとは言っていないですが、食べようと思えば毎日食べられるので、それだけで特別感はありません。

イースターの場合は元々「四旬節」という習慣があります。復活祭の46日前の水曜日（灰の水曜日）から始まります。灰の水曜日の直前に「カーニバル（謝肉祭）」というお祭りがあります。古代や中世期の信者たちは四旬節の間肉食や油っぽい食べ物を断っていたので、その前にごちそうを食べて騒いでいました。



4.断食した食べ物は卵も含めていたので、鶏が産み続けている卵を茹で、イースターまで取っておきました。現代の四旬節は何か好きなもの、または体にあまり良くないもの、お酒、たばこ、甘いものなどなどを含めるように考えられています。キリスト教の影響が消えているため、断食という習慣を守る人も減っていくでしょう。なんでもかんでも過剰な先進国では少しでも自己規制をしないと元々のこの行事の意味が分かりにくくなると思います。イースターの日曜日に四旬節が終わり、ようやく好きな食べ物をまた食べられるという部分がないと、ただのチョコレートを食べる日になります。伝統的な行事に係る知識や習慣を守らないと、商業的なイベントだけになる恐れがあります。何の意味があるか、何のために行っているか、といった問いは答えにくくなります。

「味が変わる」というところに戻ると、46日間チョコを断食した状態での最初のチョコは本当においしいです。

